



作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に「ファーストクラスの心配り」、「あなたの人格以上は売れない!」(プレジデント社)、「成「幸」学」(講談社)、「出過ぎる杭は打ちにくい!」(サンマーク出版)、「面白くなくちゃ人生じゃない!」(ロングセラーズ)、「小説・球磨川」(上下巻・ワニブックス)などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 230

明治日本人の、ある習慣が世界の犯罪史を大きく変えた!

幕末にペリーが黒船で開国を迫ったその10年前の1843年、スコットランドでヘンリー・フォールズが生まれた。父は運送業の敬虔なクリスチャンで、兄弟たちは聖書読解の日々だった。父の会社が倒産して一家はどん底に陥り、14歳のヘンリーは給仕になって夜学に通い、苦学して名門グラスゴー大学に入学、医師になる。当時ダーウィンの『種の起源』進化論が大論争を呼び、人間は神が作ったとするキリスト教と、類人猿から進化したとする科学者が対立していた。幼い頃から聖書を叩き込まれたフォールズは科学者として板挟みになる。31歳のフォールズは、科学を認めない教会に反発しながらもスコットランド教会の医療伝道師として1874年に日本に来る。外国人居留地の築地に健康社築地病院、のちの聖路加国際病院を開業する。

その頃、アメリカ人動物学者のエドワード・モースが、大森駅の汽車の窓から偶然に古代人の貝塚を発見し、万物を創造したとする神の存在に疑問を呈する騒動が起きて教会と対立していた。フォールズは信仰と科学の折り合いのつけ方で悩み続けており、「生物の進化は神が自身の存在を示すための道具である」と考えていた。そこに教会はモースを論破するため、フォールズとモースの公開討論会を開き、数千人が集まった。決着がつくはずはなかったが、意外な結果を生んだ。二人は友人になったのである。モースと一緒に大森貝塚の発掘調査に加わっているうちに、縄文土器の破片に2000年前の古代人の指紋が残っているのを発見する。フォールズは、日本人が証文に「母音で^{おうなつ}押捺」する、世界で観たことのない珍しい風習を不思議に思っていた矢先だったから、何かひらめくものがあった。指紋は各人がすべて違うのだろうか!? それからは、家族や友人、患者などありとあらゆる人たちの指紋を集め始めた。わかってきたことは、同じ指紋は親兄弟であってもあり得ず、一卵性双生児でも違い、幼児が大人になっても変わらず、指の皮膚が再生しても指紋は固有

で一生不変だという大発見だった。

ある時、病院内の医療用アルコールが減っている事件が続いた。そこに残っているガラス容器の指紋を照合したら、生徒の一人だと判明した。犯罪捜査に使えないかというさらなる大発見になった。すぐさま報告書にし、イギリスのダーウィンに宛てて手紙を書いた。世界中から指紋のサンプルを収集する協力を要請したものだったが、ダーウィンは歳を取りすぎていて返事はNOだった。ところが、ダーウィンは科学者である従兄弟のフランシス・ゴルトンにフォールズの論文を転送していた。間もなく、ゴルトンはフォールズに何の断りもなしに世界的権威の科学誌『ネイチャー』に、自分の研究成果として指紋の論文を大々的に発表する。盗作だと非難するフォールズは逆に世間の信用を失墜する。1905年、ロンドンで塗装店の老夫婦が殺害された事件で、現場の指紋が明確な証拠として採用されて解決したことで、一気にロンドン警視庁が動き始めた。だが、指紋鑑定発見者として讃えられたのはゴルトンであり、やがてフォールズは他界する。フォールズの死後57年後、二人のアメリカ人指紋検査官が、自分たちプロの道を作ってくれたルーツを訪ね、イングランド中部にある町のフォールズの荒れ果てた共同墓を探し当てた。「指紋による科学的個人識別に先駆的な功績を残したヘンリー・フォールズを顕彰して」と墓碑に刻み、二人はポケットマネーで墓を再建した。ようやく、世界に指紋鑑定発見の父として世に認められたのである。

時代は変わり、パソコンのIDチェックでも、完璧な機密保持には盗まれやすい無機的なデジタルのパスワードではなく、最終的には有機的な指紋照合が重要となっている。海外の大震災など大量の死体鑑定、身元確認でも歯形や指紋が決め手になる。ちなみに、世界最先端を走っているのは常に“指紋鑑定発祥の国・日本”の技術だという。米国司法局で指紋鑑定を担当する世界的な実力の日本人たちもいる。